

公共施設再見

第 3 回 新島村温泉ロッジ（下）

今回はまず温泉ロッジの沿革にざっと触れてみたい。平成 10 年に完成し、7 月から営業を始めた。当初、村職員が支配人として張りついて経営に当たっていた。滞在型施設として意欲的に取り組み、ふれあい農園とタイアップした芋掘り宿泊を手がけたが、実績は数組にとどまり、あえなく沈没。



いらっしゃいませ。笑顔で迎えるフロント係。

また村内の宿泊施設のパイロット事業的な役割を担って色々と模索し、大学・研究機関の研修や合宿所としての誘致に努めたが、はかばかしい成果を得られなかった。500 通の案内状を送って 3 件の問い合わせという惨状。サービスの向上を目的に島しょ会館での研修も積んだが、それを有効に活かす機会にもめぐまれなかった。ただ平成 12 年に発生した新島沖地震の際、東京都の関係者が出張で宿泊することにより、クチコミでその使い勝手のよさが伝わり、以後、それらの家族等の利用がジワジワと増えていったという。

村職員の専従は 5 年で打ち切りとなり、若干の変則的な運営を経て現在の臨時職員による形態に落ち着いた。これは独立会計とはいっても村職員の給与は一般会計の商工費から出ていたので問題視されたからである。これでは真の独立採算性の経営とはいえず、まやかしかではないか、というわけである。帳簿上は毎年 50 万円前後の利益となっていた。その後の臨時職員主体の運営でも大きな出費がない限りは、どうにか黒字を保っていた。

しかしこういったことは民間の宿泊施設の経営者からみると大甘にうつる。施設の建設費がまったく度外視され、一度ちょっとした修繕が入るとたちまち赤字に転落してしまう。非常に脆弱な経営基盤となっている。これは

毎年、一定の利益を計上し積み立てて、将来の投資に備える、そういう仕組みができなかったためである。

なぜか？ここが非常に難しい。元々、離島という交通上のハンディを背負い、繁忙期も夏の一時期に限定されていてどう逆立ちしても余剰資金のストックには無理な条件下にあった、とそういうことなのか？それともイヤイヤまだまだ伸びる余地があり、経営努力が足りなかった、ということになるのか？例えば離島というハンディは都会の喧噪を離れ静かにゆったりした時間を過ごしたい人たち

にとっては実に魅力的で、温泉を活用したリゾート地としての開発もなされていないのではないか、そういった指摘も成り立つ。屋外に囲炉裏を設けてくさやを焼いて飲食できる施設だってあってもよい。やはりまだ創意工夫の余地がありそうだ。



温泉ロッジの舞台裏。西側から見る。

折しも平成 30 年は開業 20 年を迎えるが、村では今後、大規模改修を実施して一括して民間に経営を委ねる構想をもっているという。確かにその方が財政上安定して望ましいかもしれない。

しかし年輩の住民の方たちの中にははてな？ちょっと変だな、と思われた方もいるのではないか？昔、同じようなことがなかったっけ？そう感づかれた方もいるのではないか。昭和 40 年代から 20 年余り存在した同名の施設が近在にあって同じ運命を辿ったなあ、と。歴史は繰り返すとよく言われるが、果して賢明な策なのかどうか……。少なくとも同じ轍を踏むべきではない。それには何のために施設はあるのか、その目的を明確化すべきだろう。さらに安定した収益を確保するには同じ民間とはいってもその道の専門家を招いて、プロの厳しい目を持って経営に当たってもらうことが必要だろう（少なくともアドバイザーくらいは）。こういった取り組みが大事だ。税金のムダな投入とならないよう、ここは議会もしっかりしなくてはいけない。

(公共施設再見取材班)